

年間第 11 主日 (マタイ 9:36-10:8)

ただで与えるために、私たちは召された



年間の主日が再開しました。これから待降節まで、年間の主日が続きます。年間最後の主日が「王であるキリスト」であることは皆さんご存知と思いますが、今年はあと一回、日曜日に祝日が挟まっています。8月6日に、「主の変容」の祝日が挟み込まれました。

与えられた福音朗読は、イエスが群衆を深く憐れみ、弟子たちの中から特に十二人を使徒としてお選びになる場面です。名前が書き残されることで、特別に選び出された弟子であることが分かります。汚れた霊に対する権能を授けられ、あらゆる病気や患いをいやす力を与えられました。6月の第3日曜日は「父の日」ですが、イエスが深く群衆を憐れみ、弟子たちを派遣する様子は私たちに対する「父の愛」を感じます。

さて、十二人の弟子の名前を、マタイ福音書が紹介する順に皆さん言うことができますか？どなたか典礼委員に当ててみましょう。一瞬で顔色が変わったのでやめときます。シモンとアンデレ、ヤコブとヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスとマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、イスカリオテのユダでしたね。名前を覚えておくのは、福音書でどんな登場の仕方をしていたかを思い出す呼び水になるので、非常に役に立つと思います。

ちなみに、聖書の書名も覚えておくとおおよその中身を思い出せます。「出エジプト記」と聞けば、「エジプトを脱出したんだな」と分かりますし、その前後も膨らんでいきます。名前・書名を覚えておくことは、暗記をあまり勧めない現代社会にあっても十分役に立ちます。

ここでは書名を並べませんが、中田神父は旧約聖書書名を「鉄道唱歌」に乗せて覚えました。新約聖書は運動会でよく流れる「クシコポスト」で覚えました。前任地の子どもたちにも、この歌で覚えさせました。今でも覚えてくれていると思います。楽しく覚えることができますので、皆さんには大人の黙想会の時にでも、教えてあげられたらなと思います。

イエスはこうして選んだ十二人を宣教のために派遣します。派遣するにあたって注意点や指示を与えています。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。」(10・5-6)

これは、マタイ福音書の最後の部分での派遣「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」(28・19)と矛盾するように見えるかも知れませんが、ここでは段階を踏んで、まずイエスはイスラエルの民に福音を伝えるよう弟子たちに指示し、復活後は異邦人宣教を指示したということでしょう。

ところで、「イエスはこの十二人を派遣するにあたり」ここからの部分で、指示とはちょっと違う部分があると思いませんか。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」(10・8)これは、指示や命令とは少し違う気がしませんか。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」中田神父はこの言葉に、「感謝を忘れてはいけない」とか「初心を忘れてはいけない」そんな響きを感じました。長く務めを果たしていく中では、どこかで自分勝手になるとか、驕りが生じてしまうこともあるでしょう。きちんと初心に戻り、ただで与えられた恵み深い務めを、感謝して果たしなさい。そんな戒めが、込められているのではないのでしょうか。

父の日、母の日を迎えてあらためて思います。父となった喜び、母となった喜びは、神から、無償で与えられたもののはずです。ですから父として、子に対する務めを無償で果たしていく。それが今週のイエスの呼びかけに応える道だと思います。

それぞれ、報いとして与えられたものではなく、ただで与えられた恵みがあるはずです。無償で与えられたその恵みを、誰かに、何かに、無償で与えるよう心がけているのでしょうか。いただいた恵みを与えることを、自分の喜びとしているのでしょうか。

中田神父もこれまで手に入れたもの身につけたものを、出し惜しみしてはいけないと、心の底から感じています。もうすでに司祭生活 31 年です。今日仮に倒れて、これまで通りの奉仕ができなくなった場合に、「あのことを話しておけば良かった」「こんな方法で身につけたんだよと、教えておくべきだった」そんな後悔はしたくありません。

それはあと 20 年仮に司祭生活が与えられても、考え方は同じです。私たちは皆、「ただで受けたものを、ただで与えるために」それぞれの使命に召されているのです。

年間第 12 主日(マタイ 10:26-33)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。